

令和2年度 第2回 上京区まちづくり円卓会議（はぐくみ・継承部会）摘録

日 時： 令和2年11月18日（水） 午後7時～午後8時50分

場 所： 上京区総合庁舎4階 第1会議室

出席者： 【委員】中井委員，井筒委員，高田委員，井澤委員，和多田委員，中野委員  
（欠席：大塚委員）

【進行】加藤まちづくりアドバイザー，渡邊振興係長

【職員】松本健康福祉部長，丸山子どもはぐくみ室長

議題

（1）まちづくりの基本理念について

（2）将来像「ひとりひとりが輝き，希望の持てるまち」

進行 高齢化の進行を，「長寿化社会」という言葉で表現している。また，前回の「支え合う」という文言から「希望を持てるまち」にニュアンスを変更した。

職員 高齢者という用語は，高齢者が増えていることに着目した言葉だが，今，京都市で力を入れているのが「健康長寿」の取組である。これからも長く地域で活躍していただきたいという願いを込めて，「長寿」という文言を使っている。ここには，健康も含んでいる。

進行 区役所でも健康長寿担当を設けるなど，10年前に比べて変化している。

委員 長寿化という言葉の方が，高齢者にとっても馴染むのではと思う。

進行 ダイバーシティは，方針1を中心に位置付けられていたのが，今回は全体的なところに含まれている。

委員 最近では，ダイバーシティという言葉はよく使われており，SDGsにも出てくる重要な概念だが，ダイバーシティという言葉の使い方は少し考えないといけない。方針1の文章の中に，「子ども，高齢者，障害者，外国人など多くの人がお互いの立場に・・・」というところで，そこにもう少し多様な人たちというか，多様な背景をもつ人たちを書いてもらいたい。

今回の基本計画全般に言えることだが，「上京新時代」という設定であれば，上京の1200年の伝統を踏まえつつ，新しいこと，新しい社会に向かうということがもう少し見えてくれば良い。「誰もが」という表現の中に，「今までいる人だけでなく，これから入ってくるかもしれない人も含めて誰もが」という意味合いがわかるようになると，もう少し新時代と結びつくのではないかと。

委員 多様性を受け入れるためには，区民が，多様性を理解して許容する能力を持たないといけない。そういった素養が求められてくる。価値観の違う人，立場の違う人にどのように接していくのか。対外スキルが，区民に求められるようになってくると思う。そこに対する知識をどのように養っていくのが，これからの課題になってくる。

進行 取組例というか方針の説明等に関わってくるのかと思うが，今いる人だけではないというお話に加えて，これから人とどう一緒にやっていくか，恐らくこれは元学区や担い手の話にも関わってくる。そういうことを踏まえたいうでの多様性みたいな形がもう少しあると，これからの世代の人にもつながる。

委員 つい最近の話ですが，自治会の役員選任を巡って障害を持った方が自殺するという痛ましい事件があった。自治会の役割が負担につながらないように注意しながら，加入促進をしていく必要がある。

進行 これから新しく上京区に入ってくる方にとって，それは意外にハードルが高いものなので，迎え入れる側のちょっとした配慮や，どうぞの心が大事になってくるのではないかと感じる。

委員 外から来られた方たちは、地域に適用するために様々な努力をされているようだが、受け入れる側の区民もそれに似た活動というか、何らかの取組は必要になってくるかと思う。

進行 上京区では、この10年間でも留学生の方とか、在住外国籍の方とのつながりについては、全市的にもかなりリードしてきている。そうした取組をさらに活かすことが、この部分に入ると良い。

委員 「誰もが居場所をもつことができるまちづくり」とは、誰もが主役になれることであり、「皆さんが主役になれる」という意味合いが込められていると思っている。高齢者も外国人も障害者も子供でもみんなに居場所があって、主役になるまちが良い。自分のことを認めてもらうことができる環境があることが大事だと思う。

委員 みんなが参加して、主役になってという意味だと思う。

進行 もう一步踏み込むと、こういった立場の人たちに何かしてあげるだけではなく、こういった立場の人たちが、様々な場所で主役になれるようにしようということ。このあたりは、新時代の大事なところだと思う。

委員 障害者の独り暮らしの方も、「時代まつり」の仲間に入れていただいたりしている。体力がある方も多く、運動会でも、リレーの選手として地域の仲間として認めてもらってといる。地域にはそういう暖かさがある。そういうものも出てきてありがたいと思っている。

進行 自立支援だけでなく、その人が一緒に、その人が主役になれる場面も見据えた書き方が未来志向の感じがする。

次に、方針2の「子どものすこやかな成長を応援するまちづくり」について。

区役所の子どもはぐくみ室も10年前はなかったが、今は様々な事業に取り組んでいる。

委員 「子どもがいきいきと暮らすことができる取組」の部分だが、この書き方では、約32%減少する少子化に対する答えにはなっていないのではないかと。

これだけで見ると、上京こどもまつりは既の実施している。元学区では子供さん中心の事業はもうやっている。それでも人数が減っているのは、子供さんの出生数が少ないため。子供の数を増やすことを考えないといけない。若い世代の方を上京区で定住してもらわないといけない。その観点から考えると、あまり西陣の商売にこだわる必要はないのではないかと。もちろん文化とかは大切。西陣織だけでなく、もっと新しい産業ができて、若い方がそこへ勤めて結婚されて子どもが増えていく。

もっと子どもさんを増えるような取組・環境づくりが大切ではないかと。

推進施策2でも「安心して子育てができる環境づくり」とあるが、赤ちゃんお祝い訪問とかも既の実施しているもの。実施しているのに増えない、減っていく。若い世代が上京区に定着して子どもを産んでくれるとありがたい。上京区は同志社大学をはじめ京都は大学のまちなのであるが、大学生は意外に京都に就職していない。それは何故なのか。

委員 京都の産業構造の問題とか、学生がどうしても自分の知っている会社とかに行ってしまうため。

委員 それと東京・関東に行ってしまうということ。でも、京都は「大学生のまち」なので、大学生が京都で就職したら、若い人がそこで働いて結婚して子供を産んで、子育てという流れになるとも思う。ここに、32%の減少とあって、それに対して子どもがいきいきと暮らすはわかるが、これでは増えないのではないかと。

進行 産業のお話も基本理念にもあったが、地場産業をどう維持するかどうかだけではなく、若い人が定住したくなるような新しい仕事も上京区全体でみたら少しあったら、卒業した大学生がここで住んで仕事をして、そこで子育てができるとよい。

話としては、直接子どもさんまでという話ではないかもしれないが、若い世代が働いてみたいまちにしないと、生まれるところからだけでは、少し難しいのかもしれない。

委員 いいことはされているのだが、実際に子どもさんの数がどんどん減っていくのであれば、実施し

ても直接子ども、人口を増やすことにはなっていない。

進行 他の分野で出生数を増やす取組が出ていないとしたら、ここでの記載が必要かと思うので、子育てしやすい環境づくりをすると、私たちも上京区で育てようかなというのがたくさんプランとしてあると思う。

そもそも、上京区で家族を作ったり、暮らし、生業を成り立たせようとするような環境づくりから逆算していかないと、今から産まれる子どものことしか考えていない施策では、足りないのではないかと思う。このタイトルの中でどこまで入れられるかはあるが、大事なお話、先ほどの産業の衰退をどうするかを考えるだけでは、なかなか若い世代には直接つながっていかないということもあり、もう少し幅広く考える必要があると思う。

委員 子どものことについて、子育ての取組が記載されているのが、子どもを産むとか増やすとかについては触れていない。それはほかのところで触れているのかもしれないが。事業としては「上京 de 婚活」とか、その辺をやって上京で結婚して住んでもらうとかできたらいいなと思う。

委員 将来像3の賑わいの部分に書かれている。

委員 3, 4も含めて地域の活性化であるかなと思う。メインとして書いていないが。

進行 将来像3の賑わいのところに、若い人が地域に根付いてくださるとか、産業の話もここで出てくる。賑わいと子育てがもう少し政策として連動していくような何かもう少しあった方がいいかなと思う。ここで全部は書けないと思うのですが、賑わいの施策が子どもを育てていくようなまちを応援していくような関係性がもう少し見えると、確かにいいのかなと思う。

委員 ここに出ている方針や施策というのは、どちらかというとな漢方薬というか、ここで子育てしやすくしていい環境だと人が集まってくるだろうということだと思ふ。

進行 この減り方の大きさだと、漢方薬だけではなく、もう少し積極的な何か策を打った方が、人口増につながるのではないか。この前段として、他の分野との関係でももう少し、新しい人が住んでいただけるようなものが関係していることがわかればよい。

委員 子育て世代が住むことを選択するようなまちづくりが大切。

進行 こうすると暮らしやすいとかにつながるようなもの、特に将来像3も踏まえたいので、もう少し施策を進めていく。それでは、方針3「高齢者がいきいきと暮らせるまちづくり」の意見交換へ移りたい。ここについては、地域でも10年前前から取り組まれているかと思う。様々な事業に取り組まれていると思うが、先ほどのように長寿者社会をプラスの側面でどんどん捉えていきたいと思いますという意見もあったため、御意見をいただきたい。住協や民生委員など、個別の取組は色々あると思うが、これからは高齢者で独居の方なども増えてきて、多様な観点から検討ができるかと思う。ICTを活用した取組もいくつかの学区でやられていると伺っている。

委員 ICTとは何の略か。

進行 インフォメーション&コミュニケーションテクノロジー、人と人が通信技術でつながる技術。スマホとかパソコンでつながること。コロナ禍にあつて、訪問や面会できない高齢者同士でも、ビデオ通話で顔を見たり、ICTを使った会議も地域や行政でもはじまっている。

委員 なんとなくはわかるのだが、完璧には分からない。

進行 色々な方に読んでいただくので、わかりにくいや伝え方をこうしたらいいとかも御意見をいただければ幸いです。

委員 ICTはスマートフォンのラインとかも含まれているのか。

進行 含まれる。代表的なアプリのひとつ。スマホ講座も上京区で行っている。他の区に比べても積極的に取り組んでいる。

委員 それはありがたい。

進行 学区単位といった身近なところで、地域のコミュニケーションに使ってほしいということで実施

している。

区や社会福祉協議会が主催して、こうした取組を行うのが上京の特徴だと思う。

委員 高齢者のスマホ使用者は結構多いのか。

委員 増えていると思う。

進行 別の区でアンケートを取ったら、意外と使っている人が多かった。お孫さんと動画でやりとりしている方とかもおられた。GWやお盆に帰れなくても、それでやっているとか、離れて住んでいる親御さんの顔を見て安心するとか、意外と自分は得意でないけど、子どもに教えてもらってとか、退職者が会社で使っていたので、先生役になってとか、高齢の方でも意外に使っておられるので、上京で数字はないと思うが意外に使われていると思う。

委員 高齢者がICTを活用しないのは何故かと考えている。基本的に思うのは、会議とかイベントのときに、スイッチだけ押して呼び出すのが、礼儀とかそういうところがなおざりにされることを拒否される。実際皆さん使えるのかもしれないが、そういったネットワークに入っていないのは、例えば、本当に来てほしい人にはメッセージとともに電話をかけたりとか、FAXで資料を送ったりとか、そのあたりの手間まで省略されている。おそらく高齢者の方たちは、人生の教養の中でICTを選択しないということになっているのではないかと。

進行 ICTを活用すれば、個人で様々な新しいことができるようにはなっているが、高齢者にとっては使うことにギャップがある。ICT活用を取組事例として書くのであれば、最初から使っていない方も含めて、もう少し丁寧にギャップを埋めていくことも必要。

使えるからやってほしいという言い方だが、使えるので、もう少しこうすれば意外に簡単ですよとか、もう少し寄り添った何かがあってほしい。文章としてどう書くかは難しいところ。誰がどういう形で寄り添えるかも含めて、活用していくという丁寧さがあるといい。

委員 「上京!MOW」でも、FAXだとか、ワンチャンネルに基準を統一していて、手順を明確化していることを大事にしているとの意見があった。使い方は皆知っているのだが、その情報につなぐ手順を重要にしている。

進行 皆で一緒にやれるみたいなフォローもあって、それこそ誰一人取り残さない、皆で支え合うようなことがあれば、うまく使っていけるのではないかと。コロナだからこそ考える時なので、そのあたりの表現を工夫していただければと思う。

委員 最初の基本理念については、産業と文化と絆、もう少し産業も含めてのものであるべきと思う。産業の部分が衰退とセットでしか出てこなくなっているのは、どうかならないかと感じる。

1つ目の多様性の部分は、SDGsに絡めてもう少し協調してわかりやすいリード文にしてはどうか。そこでは、移住してくる方も含めて、これから上京区の関係人口になる人たちと元からの上京の人も変わっていくのが見えていくのが良いのではないかと。

それから2つ目の子どもの部分。すごく減少しているので、単に子育てしやすいだけ、今までの延長線上では不十分ではないか。もう少し攻めるといふか若い人が住みたくなるまちにつないでいくことが必要、これは賑わい部会とも関連するかもしれない。

それから、3つ目、長寿化は高齢化よりポジティブでいい表現。ICT活用のところでマナー未成熟の部分もあるので、そうした点を配慮して寄り添って誰も取り残さずに、しかしながら情報技術の良い部分は取り込んでいけるかが読みとれば良いのではないかと。

また、時代まつり、体育祭に参加される障害者の方もいらっしゃるということで、誰もが主役になってという、単にケアされるだけではなく、主役になることのポジティブなお話をいただいた。

それぞれのところが社会全体としてはしんどい部分もあるが、できるだけポジティブな部分に変えていく、将来像を描きたいというお話であった。

### (3) 部会での意見の総括

- 基本理念のコメントについて、文化と絆があるが、単に伝統文化、文化芸術だけではなく、産業というものも含んだ広い意味での生活文化、産業文化、そういうものと思われる。
- しかし、産業という言葉については、産業の衰退とセットでしか出てこないで、少しネガティブなイメージがある。
- また、機織りの音とか、生活環境についてもちょっとネガティブな印象があったりするとの意見もあり、産業のイメージを含めてもう少しポジティブに文化を読み取れるようになったほうが良いのではないかという意見だった。
- 将来像4の「ひとりひとりが輝き、希望の持てるまち」について、方針は大きく変わっていない。
- 共通しているのはポジティブな将来像を描こうというもの。
- まず1の誰もが居場所を持つことができるまちづくりについては、誰もが、多様性、ダイバーシティの部分が強調されているところだが、この「誰もが」の部分は今上京区に住んでいる人だけではなく、これから上京区に来る人、これから関係人口になる人たちを含めてということがもう少し伝わるような書き方がいいのではないか。
- これは、まさにSDGsの理念と合致するのではないかということで、もう少し打ち出した方がいいのではないかと感じる。
- 今いる上京の人たちが新しい人をどう迎えていくか、どう受け入れていくか、そういうスキームをみつけていく。そしてそれをどう支えるかが必要なスキームではないか。
- 誰もが居場所を持つというのは、単なる居場所ではなく、誰もが主役になれることを意味するのではないか、つまり、居場所を持つのは、認めてもらうことであり、活躍できること。
- 例としては障害者の方の時代まつりや体育祭への参加がある。配慮されるだけではなく、参加して主役になる。
- 2つめ子どもについてだが、いきいきと暮らす安心して暮らすのは、当たり前のこと。
- しかし、出生数が大きく落ち込んでいるので、もう少し攻めた、若い人が定住したくなる、上京にきて子育てしたくなるようなまちづくりを進める方がよい。
- この部分は賑わい部会の施策とも関連する部分かと思う。そのつながりがもう少し見えてくる表現にしてはどうか。
- 3つ目の高齢者については、長寿化とか健康長寿は、単に高齢化ではなくポジティブなイメージでよい。
- ICT活用については、残念ながらマナー未成熟の部分があって、うまく活用できなかつたり、もっと活用できるものが、そうになってなかつたりしている。
- マナー未成熟だが、入ってこない人をどう迎え入れるか、寄り添って考えていく必要がある。
- 全体として、高齢化、少子化と少しネガティブな中で、ポジティブなまちづくり像が示されていてよいとのこと。

以上